二人

Two of Us

Toshiaki Karasawa

唐沢寿明

ふたり

唐沢寿明

〈著者紹介〉
唐沢寿明　1963年6月3日東京都生まれ。主作品●〈舞台〉「ボーイズレビュー・ステイゴールド」でデビュー。「から騒ぎ」「真夏の夜の夢」「TABOO」(三作品とも野田秀樹演出)、「出口なし!」(三谷幸喜)、「熱帯祝祭劇マウイ」(宮本亜門)●〈ドラマ〉「純ちゃんの応援歌」「春日局」「愛という名のもとに」「ホームワーク」「西遊記」「妹よ」「輝け 隣太郎」●〈映画〉「おいしい結婚」「ハロー 張りネズミ」「高校教師」「君を忘れない」他。

GENTOSHA

ふたり
1996年5月8日　第1刷発行

著　者　唐沢寿明
発行者　見城 徹

発行所　株式会社 幻冬舎
〒160 東京都新宿区四谷1-22-6

電話:03(5379)8011(編集)
03(5379)8086(営業)
振替:00120-8-767643
印刷・製本所:中央精版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©TOSHIAKI KARASAWA, GENTOSHA 1996
Printed in Japan
ISBN4-87728-107-X C0095

ふたり

目次

高校をやめたとき　11
身震いするほど嬉しかった　24
「あんたが出ていきなさい」　42
おふくろの言葉が信じられなかった　59
新宿は一番好きな街だった　69
カッコよく踊ることだけ考えていた
アクション・クラブを首になる
また、はじき出されてしまった
ドサ回り、劇団結成、売り込み
できることは何でもやった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

天に昇ったと思ったら、また突き落とされる　84
相手にされないレコード会社回りが始まった　98
一年でやめるつもりのショーパブ勤め　107
月三十六万円は多すぎる　121
「食費を出してくれないかな」　130
彼女の言葉が別れの原因になった
オーディションに受かったぞ
悲しい訣別の果て
ポロシャツを着た日
「さわやかな笑顔」の練習をしてみた

「潔」から「寿明」へ　143
運を変えてみたい
朝の連ドラに出演！　154
山口智子と出会う
浅野ゆう子さんとの出会い　167
トレンディ・ドラマの世界へ
おれという多重人格　179
才能のあるなしを考える余裕はない
『純ちゃん』の収録が終わった日　194
初めて手と手が触れた

「山口智子、暴漢に襲われる」
危険と紙一重の生活 205
「きれいになったな」
ふたりの新しい居場所 215
電撃入籍報道
実家に帰ったのは十六年ぶりだった 225
あとがき 236

ずっとずっと「ひとり」だった。

学校から抜け出し、家や養成所からは追い出された。食べるためにもぐり込んだバイト先にもなじまなかった、自分たちで作った劇団も消滅した。

居場所がなかった。

それでもひとつだけわかっていたことがある。

役者になりたかった。

人気が欲しかったわけではないし、どうしてもお金が欲しかったわけでも、もちろん、ない。

演じること。

それが、家も、学歴も、所属する場所も持たない人間にとって、世間への唯一の接点になっていた。人として認められるかもしれないたったひとつの手段だった。人はよく才能という言葉を使う。けれど、そんなものもあるなしを考えている余裕はなかった。その道を歩くしかなかった。逃げ道はなかったから、その道を歩き続けるためには何でもやった。

バカなことばかり。失敗だらけ。恥だらけ。

唐沢寿明と芸名をつけたときから食べていけるようになったけれど、その現状に「もうひとり」の自分である本名の唐沢潔は苛立ち、腹を立て、口をはさむようになってくる。おまえのやりたいことは、本当にこんなことなのか。

よくある話だろうか。

大きな道を堂々と歩いていける人たちは、それでいい。けれども今も自分だけの道を手さぐりで歩いている人たちがいるはずだ。

失敗し続けてわかったことのひとつは「望んだことは叶(かな)う」という単純な事実。

必ず、いつかは、あきらめさえしなければ……。

何かをやろうとしている人間が、世間とは少し違う道を歩いているだけで、はじかれるのを見るのはたまらない。

必ず、いつかはだれか、自分を見つけてくれる人が出てくると信じてほしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ふたり

構成　中原悦子
装幀　高橋雅之

高校をやめたとき
身震いするほど嬉しかった

高校をやめた日のことは今でもよく覚えている。高校二年の二月だった。寒さの真っ只中とはいえ、ときおり春めいた暖かい日が続き気持ちを弾ませる。何か新しいことを求め身体はうずうずしてくる。身体を動かし、行動を起こしさえすればすべてがうまくいく、そんな錯覚をもたらしてくれる気持ちのいい一日。そんな日だった。

通っていたのは、都立の工業高校だった。都立蔵前工業。

小・中学の頃から、学校には興味がなかった。特に勉強が嫌いだったわけじゃないし、友達がいなかったわけでもない。中学のときの成績もそう悪くはなかったから、入った学校は工業校とはいえ、偏差値もそれなり。けれど入る前から「いずれやめるだろう」と感じていた。中学三年の進路相談のときから、高校は入れればどこでもいいとさえ思っていた。高校に行くよりもっとやりたいことがある。人には決して言えなかったけれど、進む

道は決まっていた。

役者の道に進みたい。心の中で、十年以上も前に見たひとりの人物の姿がいまだに精彩を放っていた。

五つか六つの頃、映画館で初めてブルース・リーに出会った。スクリーンの中の彼は強靭だった。決して大きいとはいえない身体からは、あふれんばかりの生命力がみなぎっている。身体中のエネルギーを目標に向けて集中させる精神力。筋肉の一筋一筋の動きさえも自分の思い通りにできるまでにした鍛錬の力。鍛えさえすれば、あれほどの力と美しさを持てるようになるという驚き。

強さだけに魅かれたわけではない。人を倒したあとに一瞬見せる寂しそうな表情が心に焼きついて離れなかった。相手を打ち負かして誇らしいはずなのに、どうしてあんなに哀しそうなんだろう。まるで自分が倒されたようじゃないか。倒される相手の哀しさ、悔しさ、寂しさを本人以上に感じているかのような表情。どんなに絶対的なものでも、いつか

は倒されることを知っているから、あんなに哀しそうなのだろうか。それとも強さとは、これまで倒した相手の悔しさ、哀しさをも自分の中に蓄えていくものなのだろうか。

彼の強さ、動きの美しさ、そして表情のなぞを解きたくて、何十回も映画館に足を運んだ。熱が高じて、家でも彼のまねをして遊ぶようになった。

芝居への原点というものがあるとしたら、おれの場合はマーロン・ブランドやロバート・デ・ニーロではなくブルース・リーの強さ、哀しさといえる。

中学のとき、演劇部に入ろうとしたことがある。放課後、講堂の片隅で、何人かが集まって議論し合ったり、小声で語り合っているのが、何か秘密めいて見えた。でも実際に演じられる劇を見ると、何か自分の気持ちにそぐわない。せりふは不自然だし、感情表現もオーバー。これはおれのやりたいことじゃないな、と入部するのをやめてしまった。

いわゆる「職業俳優」になりたかったんだと思う。学生が趣味や自己表現のために芝居をするのではなく、それによって認められて、ちゃんと食べていける、そんな役者になり

たかった。

子どもの頃の夢を現実のものにするためには、だれでもいくつかの選択をする。高校をやめたとき、いやそれ以前に高校はどこでもいいと決めたとき、役者になる夢にほんのわずかだけど、近づいたような気がした。望むものを手に入れるためには、何かを捨てなければならない。捨てるものが多ければ多いほど、進む道ははっきりしてくる。

役者になりたいという気持ちが大きすぎたため、ほかのことはどうでもよかったのかもしれない。高校生活は退屈だった。偏差値がなまじいい学校だっただけに、授業は難しい。普通、工業高校というと、現場で働くブルーカラーを養成することになっている。ところが、そこはホワイトカラー、いわゆる設計の方に重きをおいていて、数学の計算ばかりをやらされる。何のために難しい数式を解いたり、設計のための線を描いたりしなきゃいけないのかわからなくなった。今やっていることが自分の将来につながる線には見えなかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook